



学校制度は移民の生徒の増加に どのように対応しているのか？

- 移民の背景を持つ生徒の割合を2000年と2009年で比較すると、OECD平均で2ポイント増加している。
- PISA2009年調査に参加した13のOECD加盟国及び非OECD加盟国・地域では、移民の背景を持つ生徒の割合が5%を超えている。
- ほとんどの国で、移民の背景を持つ生徒はネイティブの生徒よりも成績が劣っており、また多くの国でその差は著しい。しかしながら、オーストラリア、ベルギー、カナダ、ドイツ、ニュージーランド、スイスでは、両者の成績の差は小さく、ほとんど同じくらいという場合もある。

より良い生活を求め、紛争から逃れるためであったり、あるいは社会・経済的機会を得るためであったり、理由は様々であるが、そこに国境がある限り、人々は国境を越えてきた。現代の交通手段やコミュニケーション手段、労働市場のグローバル化、OECD諸国における高齢化は、今後数十年にわたって移動を加速化するであろう。こうした人口移動にあって、社会の団結を維持するために重要なのは、移民とその家族を移民先の国にうまく統合させることであり、教育はこれを成し遂げる上で強力な方策となる。

ネイティブの生徒とは、PISA調査が実施されたその国で生まれた生徒、あるいは少なくとも一方の親がその国で生まれた生徒を指す。

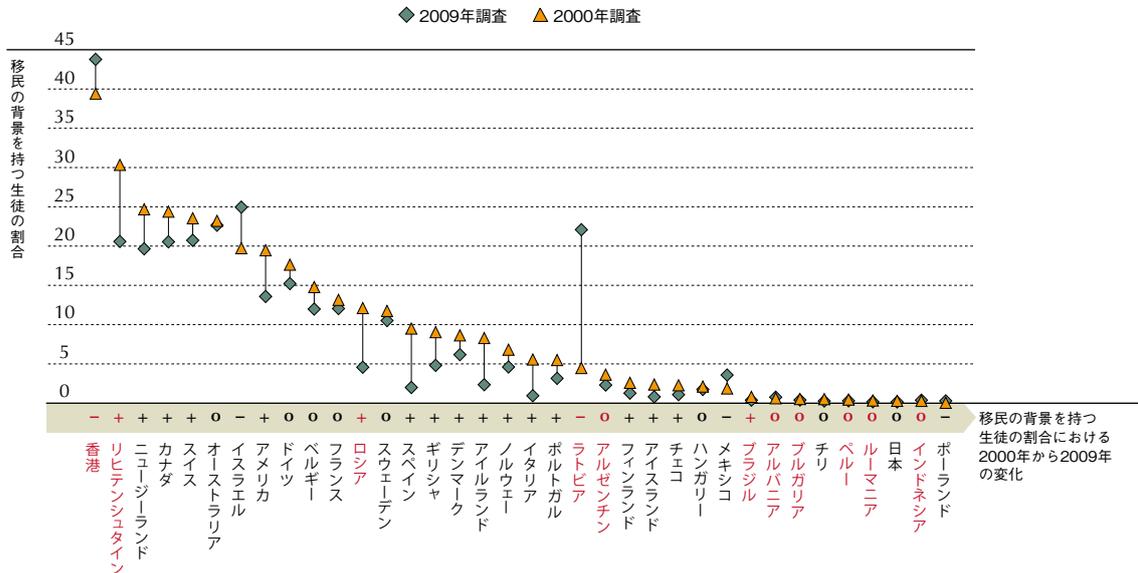
移民の生徒とは、移民の背景を持っていて、彼ら自身が移民**第一世代**（生徒自身も親も外国で生まれている場合）もしくは**第二世代**（生徒自身はPISA調査が実施されたその国で生まれたが、親は外国生まれである場合）のいずれかの生徒を指す。



PISA

IN FOCUS

2000年調査及び2009年調査における移民の背景を持つ生徒の割合



2009年の方が2000年よりも多い	2009年の方が2000年よりも少ない	統計的な有意差なし	95%信頼区間
+	-	0	

国・地域は、2009年調査において移民の背景を持つ生徒の割合の多い順に左から並べている。
 出典: OECD, PISA 2009 Database.
 Table V.4.4 (StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932382235>).
 Figure V.4.6 (StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932360005>).

移民の生徒の割合が 継続的に増加…

PISA2009年調査で実施した生徒質問紙から得られた結果から、移民の背景を持つ生徒の割合は、OECD平均で2000年調査と比べ2ポイント増加した。13のOECD加盟及び非加盟国・地域では、移民の背景を持つ15歳児が増え続けており、5%を越えている。アイルランド、ニュージーランド、スペイン、アメリカ及び非OECD加盟国のリヒテンシュタイン、ロシアでは、移民の背景を持つ生徒の割合がこの10年間に5ポイント以上増え、現在では、それぞれ15歳児の8～13%を占めている。イタリア、ギリシャ、カナダでは、移民の背景を持つ生徒の割合が同じくこの10年間に3～5ポイント増え、カナダでは15歳児の約25%が移民の背景を持つ生徒となっている。

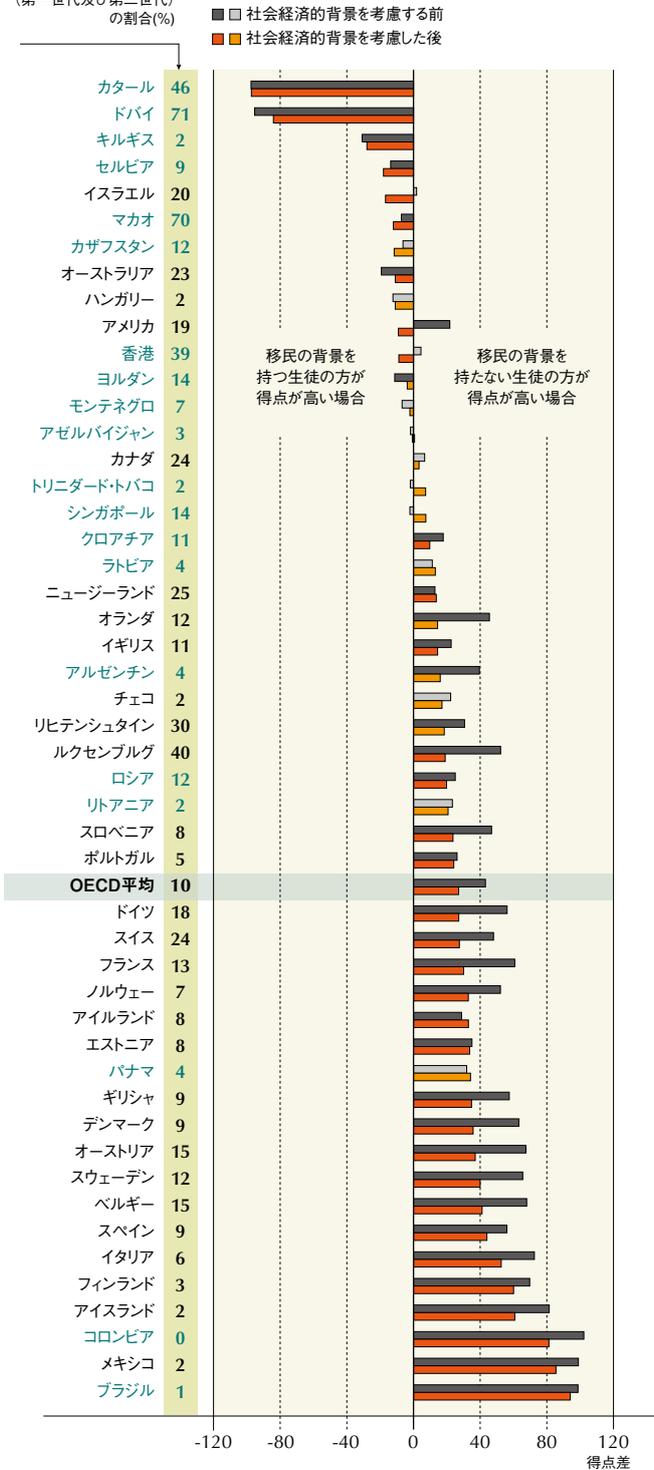
…だが、成績の格差が 縮まっている国もある。

こうしたデータがなぜ教育政策にとって意味があるのだろうか？それは、2000年調査と2009年調査を比較すると、ネイティブの生徒の方が移民の背景を持つ生徒よりも平均得点で40点以上成績が良いという結果となったものの、中にはこうした格差を縮めることに成功している国もあるからである。例えば、依然として、ベルギーではネイティブの生徒の方が移民の背景を持つ生徒よりも68点、スイスでは48点、得点が高いものの、両国ではこの10年間で、両者の得点差が約40点縮まった。特にスイスについては、移民の背景を持つ生徒の割合が増えたにもかかわらず得点差が縮まったのである。ドイツ、ニュージーランド、リヒテンシュタインも、ネイティブの生徒と移民の背景を持つ生徒との得点差が縮まった国である。



社会経済的背景を考慮する前と後で見た、 移民の背景を持つ生徒と持たない生徒の 読解力得点の差

PISA2009年調査における
移民の背景を持つ生徒
(第一世代及び第二世代)
の割合(%)



注: 統計的に有意な得点差は、濃い色で示す。
国・地域は、社会経済文化的背景を考慮した後の得点差(移民の背景を持たない生徒-
移民の背景を持つ生徒)が小さい順に上から並べている。
出典: OECD, PISA 2009 Database.

Table II.4.1 (StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932381418>).
Figure II.4.5 (StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932343608>).

生徒の移民の背景の有無にかかわらず、生徒間の得点差を最小限にすることに成功している国もある。例えば、オーストラリアでは移民の背景を持つ生徒の方がネイティブの生徒よりも成績が良く、また、カナダでは移民の背景を持つ生徒の割合がますます増えているにもかかわらず、2009年調査で見ると両者の成績が同じ位である。

社会経済的背景が成績における格差を説明できるのはごく一部に過ぎない。

これらの経年変化が我々に教えてくれるのは、政府や学校が、移民の背景を持つことによって不利な条件にある生徒を支援し、その状況を克服させることのできる方法があるということである。移民の背景を持つ生徒は、社会経済的に不利な状況にあることが少なくない。OECD平均では、こうした生徒の親はネイティブの生徒の親よりも教育の水準が低く、地位の低い職業に就いていることが多い。さらに、こうした生徒はネイティブの生徒よりも、家での教育的リソースや物的リソースに恵まれない傾向がある。そこで、例えばルクセンブルグについて生徒の社会経済的背景を考慮してみると、移民の背景を持つ生徒とネイティブの生徒の得点差が52点から19点に縮まる。PISA調査を実施したその国のネイティブであるか移民の背景を持つかにかかわらず、社会経済的地位が同程度である生徒を比較すると、OECD平均で得点差は43点から27点に縮まる。

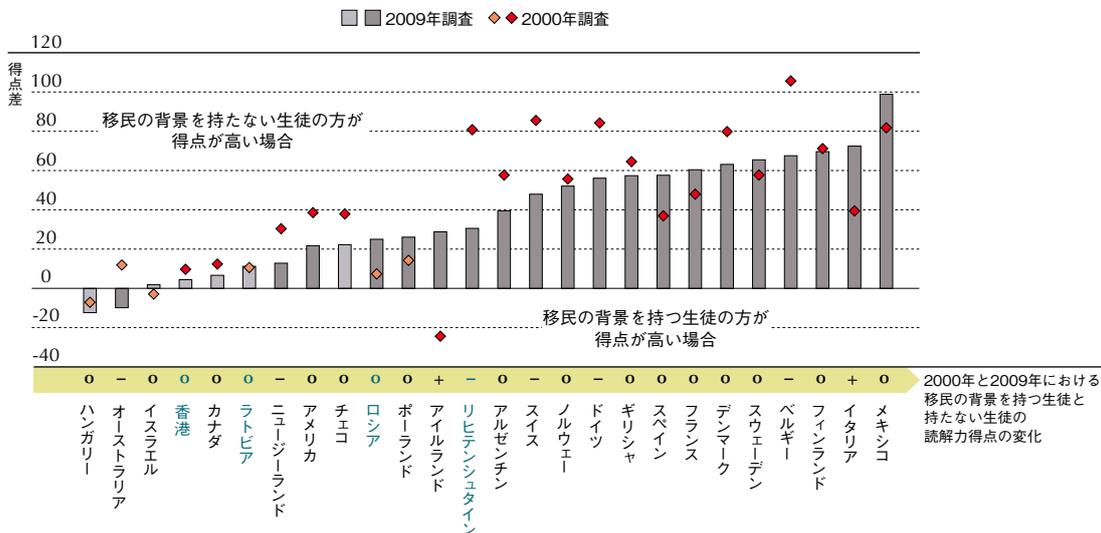
だが、社会経済的背景を考慮した後であっても、1学年の半分以上に相当する得点差があるということは、生徒の成績に影響を与える他の要因もあり得ることを示唆している。その意味では、これらは生徒が生まれた場所、例えば彼らが移民の第一世代なのか第二世代なのか、あるいは彼らが家で話している言語がPISA調査で使用した言語と同じであるかどうかといったことが関係しているのかもしれない。



PISA

IN FOCUS

移民の背景を持つ生徒の2000年調査と2009年調査の読解力得点



2009年の方が2000年よりも多い	2009年の方が2000年よりも少ない	統計的な有意差なし
+	-	0

95%信頼区間

注: 統計的に有意な得点差は、濃い色で示す。
 国・地域は、2009年調査における移民の背景を持つ生徒と持たない生徒の得点差(移民の背景を持たない生徒-移民の背景を持つ生徒)が小さい順に左から並べている。
 出典: OECD, PISA 2009 Database.
 Table V.4.4 (StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932382235>).
 Figure V.4.7 (StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932360005>).

それ以外の要因を考慮したとしても、移民の背景を持つ生徒と持たない生徒の得点差は国によって大きな違いがあるし、この間にその差が拡大している国もあるが、それでも、公共政策によって状況を改善することができることは明らかである。例えば、教師の言うことを理解できない生徒は学習ができないのだから、鍵となるのは効果的な言語教育である。

結論: 学校システムは、移民の背景を持つ生徒が高い成績を収める上で障害となることを明らかにし、彼らのニーズに応じたプログラムを開発することによって、彼らが育った国に社会経済的に十分統合させることができる。

本稿に関するお問い合わせ先
 担当: Maciej Jakubowski (Maciej.Jakubowski@oecd.org)
 出典: PISA 2009 Results: Overcoming Social Background: Equity in Learning Opportunities and Outcomes (Volume II) 及び PISA 2009 Results: Learning Trends: Changes in Student Performance Since 2000 (Volume V)

参考サイト: www.pisa.oecd.org www.oecd.org/pisa/infocus	次回テーマ: 「少年少女はデジタル時代に備えができてる?」
--	---

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。